

痕跡は何を物語るのか

考古学者は、土器や石器といった「モノ」に残る痕跡から、過去の人々の生活や歴史復元につながる様々な情報を引き出してゆく。それは、あたかも警察の鑑識のようでもある。今回は、2万年をさかのぼる旧石器時代の石片（長さ約10cm）に残された痕跡とそれが物語ることを紹介する。



その石片は、川南町にある番野地遺跡で大野寅男氏によって採集された。上の写真は石片のオモテ・ウラをそれぞれ撮影したうえで、左にオモテ、右にウラを並べたものである。ウラには、番野地採集であることを示す“BAN.”の文字が白インクで注記されている。

この石片、まず目に付くのは、灰黒色・薄黄色・エンジ色に分かれたカラフルな器面ではなかろうか。石片は、もともと真っ黒い色をしていたようだが、2万年以上もの長い間、土の中に埋まって表面が風化した結果、灰黒色と薄黄色のまだらに変色した。エンジ色の部分は、火熱を受けた部分がそうでない箇所と異なる風化をみせたことで生じたものと考えられる。また、その範囲は、オモテ・ウラとも同じようなカーブを描いている。つまり、何かに覆われたことで火熱を受けなかった箇所と剥き出しで火熱を受けた箇所が1つの石片の中にあるとわかる。

また、実際に手に取ってみると、石片の縁は、鋭い刃のようになっているのだが、火熱を受けたことでエンジ色に風化している部分の縁に細かなキズ（おそらく使用痕）が多く集まっているとわかる。

これらの状況からは、たとえば、木製の柄に石片を埋め込み、小刀のように使っていたと想定できまいか。

そうであれば、柄に覆われず剥き出しであった刃の部分が火を受けたこととなり、その刃には多くのキズが残されたということになる。

石片に残された痕跡の観察から、2万年前以前の旧石器人が使った道具の姿が見えてくる。
(藤木 聡)

